

かかわる力を育む幼小一貫の道德教育カリキュラム開発のための基礎研究

宮里 智恵 井上 弥 鈴木由美子 石原 直久
岡野 佳子

1. 問題の所在と本研究の目的

近年、青年期におけるいじめやひきこもりなどの反社会的行動や非社会的行動の増加が問題となっており、これらの行動の背景には対人関係能力の未発達があると考えられる。

対人関係能力は人と直接かかわることで育つものであるが、少子化や核家族化、地域社会の崩壊などにより、子どもを取り巻く人的環境は大きく変容した。子どもは限られた人間関係の中で成長せざるを得ない状況にある。近年では、人と深くかかわり合うことを避け、互いに本音を隠したまま表面的なつきあいをしようとする青年層の増加も指摘されている。

いじめやひきこもりなどの反社会的・非社会的行動は青年期に顕在化するが、その問題の原因は児童期に蓄積していることが指摘されており、集団生活を開始する幼児期から児童期にかけて人とかかわる力を継続的に育成することは大変意義あることである。

幼稚園や小学校においては、人との望ましいかかわり方についての道德教育が日々行われているが、それらは事例対処的であり、対人関係能力の育成に向けた意識的系統的な教育にはなり得ていない。それは、対人関係能力の育成を意図し幼小を貫いた形の道德教育カリキュラムがないことに原因があると考えられる。

広島大学附属三原学園においては、園児・児童・生徒の異校種異年齢交流活動を行っており、子どもの対人関係能力の育成に成果をあげている。特に小学校4年生と幼稚園年長児のペアでスタートする交流は、その後3年間同じペアで活動する。幼稚園年長から小学2年までは年上とのペア活動を、小学4年から小学6年までは年下とのペア活動を行うこの交流活動は、数年の間に年下と年上の両方の立場を経験できることから対人関係能力の育成に効果があると考えられる。

そこで本研究においては、三原学園の小学4年生と幼稚園年長児とのペア活動を対象に、ペア活動の初年

度における対人関係能力の育成に有効な要因を規定し、人とかかわる力を育む幼小一貫の道德教育カリキュラムの開発に必要な基礎資料を得ることを目的とする。

2. 研究の方法

(1) 対象

広島大学附属三原学園 幼稚園年長児(ゆり組34名)と小学4年生(4年7学級37名)で構成する34組のペア

(2) 方法

- ① 平成17年5月～12月までのペア活動における年長児と小学4年生のかかわりの様子をビデオ録画し、その分析を行う。
- ② ペア活動前後に小学4年生に対しアンケート調査を行う。
- ③ ペア活動に関し、担任教諭に聞き取り調査を行う。
- ④ 4年生を含めたいくつかの学年を対象に道徳性検査や社会性調査を行う。
- ⑤ ①～④の資料を基に道徳性の発達という観点からペア活動の有効さを規定する要因を探る。

3. かかわる力を育む異校種異学年ペア活動(小学4年生を中心に)

ここでは平成17年5月～12月までのペア活動について小学4年生の様子を中心に追いながら、それぞれの時点での子どもたちの様子をビデオ映像の分析によって捉えるとともに、子どもたちの心情をアンケート調査と担任教諭への聞き取りを通して掴む。

(1) 児童の属性と活動への事前の思い

ペア活動開始前に、4年生の子どもに数項目のアンケート調査を実施した。結果は次の通りである。

図1はこれまでの生活の中で、「自分より小さい子

